

主題	ダイバーショナルセラピーの導入による入居利用者におけるアプローチ方法とその効果		
副題	もっと楽しく もっと自分らしく レジャー&ライフスタイルに焦点を当てて		
ダイバーショナルセラピー		アセスメント	
研究期間	13ヶ月	事業所	特別養護老人ホーム つきみの園
発表者：山梨敬（やまなし たかし）		アドバイザー：日本DT協会理事長 芹澤隆子	
共同研究者：小松崎潤、石川祐子、田島裕子、沖山順平、對馬博子、鹿島仁子、出川恵美			
電 話	042-386-6811	メール	tsukimi@seirouin.or.jp
FAX	042-386-6512	URL	http://seirouin.or.jp/tsukimi/

今回発表の事業所やサービスの紹介	東京都小金井市にあり、社会福祉法人東京聖芳院が運営する特別養護老人ホームです。平成12年に開設しました。特養入居者93名、ショートステイ利用者10名が生活されております。ヘルパーステーション、居宅介護支援事業所、地域包括支援センター、在宅サービスセンターを併設しています。
------------------	--

《1. 研究前の状況と課題》

利用者の身体機能やその状態に応じたケアを記載するアセスメントシートを作成している。そのため、施設サービス計画書の内容の多くは、身体機能に関するケア内容となっていた。利用者の生活には、楽しむこと、好きなことが欠かせない。しかし、生活歴や趣味、仕事等を知る方法や手段が明確になっていない、知り得た情報と生活のつながりがみえていないことが課題であった。

平成22年度に中堅職員研修のテーマとしてダイバーショナルセラピー（以下DT）の講義を受け、個々のライフスタイルを根拠とした楽しみ・レジャーの提供は利用者の尊厳にとって重要なケアであるということ学んだ。

DTアセスメントに基づいた利用者の自分らしく、楽しい生活をサポートするためのケアや環境作り、レジャーを検討することとした。

《2. 研究の目標と期待する成果・目的》

利用者個々のライフスタイルに着目した生活環境の整備を目指し、そのために必要なアセスメントに力点を置くこととした。

DTの活動は、長期的に継続する予定である為、平成23年5月からの一年間は、「ライフスタイル」や「レジャー」に着目したDTアセスメントシートを作成し、全利用者分の記入を終了することを目標とした。

同時に、日常の生活では表れにくい・感じとりにくい利用者の思いや表情の変化を引き出すためにSONASセッション等DTプログラムを実施し、その活動の内容をアセスメントシートへ記載することで、アセスメント内容の充実と必要性を全職員が認識できるよう取り組んだ。

《3. 具体的な取り組みの内容》

1、DT検討委員会の設立

2、DTのコンサルタントの招聘

日本DT協会理事長が月に一度来園し、DTプログラムの実施、アセスメントシートの作成、DT理解のための職員への研修などのコンサルティングを受けた。

3、アセスメントシートの作成の手順の検討と全利用者の作成

7月にアセスメントシート作成、配布。見直しは半年に1回とし、記入者は、ケアワーカーのみではなく、関係セクション全員が記入できるようにした。

4、アセスメントを活用したDTプログラムの実施

五感を活用する小グループでのSONASセッション（延べ参加者数86名）や、集団の活動には参加しにくい利用者を対象とした個別活動のルームヴィジット（同16名）を実施し、その都度評価をし、再アセスメントを実施。

《4. 取り組みの結果と考察》

1、DTアセスメントシートの作成

当初は、DTについてとDTアセスメントシートの周知が不十分であり、記入内容が少なかった状態であった。10月にはファイル方法の見直し、4月より、月の重点項目を設定した。このことにより、情報の収集、管理しやすくなり、記入内容量の増加がみられた。全項目に対して52%のアセスメントが終了している。

2、DTプログラム

利用者の笑顔や、利用者同士の会話がみられ、反応は明らかな変化があり、プログラム中は利用者が中心となり進んでいく場面も多くあった。利用者の普段と異なる一面を発見することができた。DTプログラム以外の日々の生活場面の声掛けやクラブ活動の内容も、ご利用者の好きな事を取り入れる等の職員の視点にも変化がみられている。

《5. まとめ、結論》

アセスメントシートをもとにしたご利用者の個々に合わせた生活環境の整備の検討段階である。しかし、現段階であっても、すでに「～さんは～がすきだから選択して頂こう」「～さんは、～の経験があるから、～して頂こう」とその人らしさをプラスした声掛けを行うことによる効果がみられている。効果は、ご利用者の表情や反応に変化としてみられている。

今後は、身体面のアセスメントとライフスタイルに着目したアセスメントを両輪とした施設サービス計画書を立案し、より根拠が明確となったケアを提供できるように、さらに取り組んでいきたい。そのためには、DTの理解が不可欠である。DT委員以外の全職員への研修やプログラムの実施を継続していく必要がある。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

本研究発表を行うにあたり、ご本人及び、ご家族に口頭にて確認をし、本研究発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることは無い事を説明し、回答をもって同意を得たこととした。

《7. 参考文献》

渡辺嘉久・芹澤隆子監修著（2004年）全人ケアの実践—ダイバーショナルセラピーのすすめ 朱鷺書房

《8. 提案と発信》

施設入居者自ら何かを発信することが出来にくい状態である。現状では、1日の中の限られた時間にレクや散歩などを行っているが、利用者がどなたでも、好きな事ややりたい事が、食事・排泄・入浴等のケアと同じ位重要であると全職員が意識を持つ生活を考える為に、DTの導入は有効である。

【メモ欄】